

尊徳は報徳仕法について実践をとおして人々に教えてきました。尊徳の死後、弟子たちは尊徳の教えを世に広めるため、尊徳の行動や言葉を書き記し、出版しました。その一番はじめとなったのが、富田高慶が尊徳の生涯をあらわした『報徳記』です。

報徳記の内容

と刊行までの経緯

『報徳記』は、二宮尊徳の伝記で富田高慶があらわしたものです。



報徳記 8巻8冊 (小田原市報徳博物館所蔵)

弟子たちは、報徳仕法を実施する上で、疑問に思ったことを尊徳に相談してきましたが、安政3年(1856)秋に尊徳が亡くなると、それができなくなってしまいました。そのため、弟子たちは一堂に集まり、これまで見たこと聞いたことを語り合い、江戸の有名な学者を招き、記録してもらいましたが、読みやすく表現がうまくても、情熱の感じられない文章だったそうです。そこで弟子たちはふたたび話し合いをし、一番弟子の高慶が改めて書くことになりました。それが『報徳記』のもととなりました。

明治にはいり、旧藩主相馬充胤を通して、『報徳記』が明治天皇に献上されたことをきっかけに、明治16年(1883)宮内省版として刊行され、知事以上に配られました。さらに役人にも読ませようと、明治18年、農商務省版が刊行されました。一般向けに刊行された最初のものは、明治23年に刊行された大日本農会版です。これ以降、二宮尊徳に関する著作は、ほとんどこの『報徳記』をもとにしています。



報徳記の富田高慶自筆の原稿 (南相馬市所蔵)

貧富訓とは

富貴となるためには自分の分度を知り、それに応じて生活することが大切であると説いたものです。



貧富訓の碑
小田原市尊徳記念館敷地内 二宮尊徳生家前

富	貧	富	貧	貧富訓
則ち富貴其の中に在り	則ち貧賤其の中に在り	遊樂分内に退き、勤苦分外に進めば、	遊樂分外に進み、勤苦分内に退けば、	
分外則富貴在其中	分内則貧賤在其中	遊樂退分内勤苦進	分内則貧賤在其中	遊樂進分外勤苦退

[解説文]

遊び楽しむことが自分の分度を越えてしまい、勤労の苦しみにより得られるものが分度に足りなければ自然と貧乏になってしまう。その反対に遊樂を分度内でおさえ、勤苦により得られるものが分度より多ければ自然と富貴となる。

一円札になった尊徳

第二次世界大戦後まもなく昭和21年(1946)3月19日、日本銀行より新しい紙幣が発行されました。そのうちのいちえんさつ(一円券)は二宮尊徳の肖像画を図柄にしたものです。



紙幣の中の肖像画





報徳仕法から学ぶことは？——報徳訓——

「報徳訓」は、二宮尊徳の教えをよみやすくわかりやすくするためにまとめたものです。

報徳の訓え（教え）というのは、人が他から受けた徳に対して、徳でこたえ報いることを教えたものです。

非常に具体的でわかりやすく、日常の生活によくあっていたことから、農民にもよく理解されました。



報徳訓 (二宮尊親) P39 (南相馬市原町区 門馬経房氏所蔵)



報徳訓 (二宮文) P39 (南相馬市原町区 門馬経房氏所蔵)

報徳仕法 コラム

報徳訓と道歌

道歌 親子一体の歌

父母もその父母もわが身なり
われを愛せよ我を敬せよ

今自分があるのは、父母さらにその父母とつづき、こうした祖先たちの働きと努力により、自分がここにいるのです。父と母、祖先たちを愛し、尊敬することはもちろん、自分自身も愛し、尊敬することが大事であると尊徳は伝えています。この根底は報徳訓の教えと同じものです。

報徳訓を現代のごとび直すと・・・

お父さん・お母さんがなせいのかというところ、それは、それぞれにおじいさん・おばあさんがいたからです。おじいさん・おばあさんには、そのまたお父さん・お母さんが……というように、すくことさかのぼっていくと天地（大自然）の命するところにいきつきます。

さて、自分が今こうしていられるのはなぜかというところ、それはお父さんとお母さんが大切に育ててくれたからです。また、自分の子どもや孫が心豊かに生きていくにはそのお父さん・お母さんの愛情と努力が必要です。

お父さん・お母さんの豊かな生活は祖先の働きと努力があったからです。自分の豊かな生活は、お父さん・お母さんがよい行いを積み重ねてくださったおかげです。自分の子どもたちが豊かな生活をおくるためには、今、自分がまじめに学び働くことが大切です。

ところで、元気で長生きするには衣・食・住の三つが大事です。この衣・食・住という人間の生活のもとになるのは、自然の恵みを生み出してくれる田畑山林です。その田畑山林も人々の働きがなければ恵みを生み出しません。今年の衣・食は昨年一生けんめい働いたおかげです。来年の衣・食は今年の苦労やがんばりのおかげです。いろいろなものよさをひきだす努力（報徳）を、いつでもいつまでも忘れないことが大切なのです。

報徳訓読み下し文

父母の根元は天地の命令に在り
子孫の相続は夫婦の丹精に在り
吾身の富貴は父母の積善に在り
身命の長養は衣食住の三つに在り
田畑山林は人民の勤耕に在り
来年の衣食は今年の艱難に在り

身体の根元は父母の生育に在り
父母の富貴は祖先の勤功に在り
子孫の富貴は自己の勤勞に在り
衣食住の三つは田畑山林に在り
今年の衣食は今年の産業に在り
年年歳歳報徳を忘るべからず

道歌は文字の読めない農民にも、教えを伝える方法としてつくられました。テンポよく読むことができ、わかりやすくおぼえやすい内容になっています。

このほか、弟子に対しても、たとえにしてわかりやすく教えた話が残っています。

道歌とは 二宮尊徳が作った短歌は、その大部分が人倫・徳行・生活に関するものです。これを「尊徳の報徳の道の歌」、略して「道歌」といいます。

佐々井信太郎著『解説二宮先生道歌選』（昭和34年 一円融合会）より

道歌 報徳の歌

何事も事足りすぎて事足らず
徳に報ゆる道の見えねば

何もかも、ものごとすべて足りすぎているのに足りないと思うのは、徳に報いようという道が見えないためである。
(現在の世の中のことすべてを当然のこととっていると、まだ不足だと不満足を訴える心になるが、もし、自分が徳に報いる気持ちになれば、今のままでも常にありがたい生活がおくられる。)

道歌 迷いの歌

文々と障子にあぶのとぶ見れば
明るき方へ迷ふなりけり

あぶが家に飛んできて、障子に突き当たり、出口を見つけられず、ただ、明るい方へばかり行って悩んでいる。
(迷うということは、行くべき「道」を見そこなったためである。迷ったために、無用の労力と時間を空費する。人生の迷いは、無明の因縁から発し、利のため地位や名誉のために道を失うことである。)

道歌 徳行の歌

山寺の鐘つく僧は見えねども
四方の里人ときを知りなん

村里を離れた山寺で寺僧が朝夕読経の鐘をつく、村の人は早朝から私も仕事をしようと心掛ける。
(山寺の和尚は寺から里へ出て来なくても、朝早く鐘をつくという行いの実行は里人に早起きという教育をすることになる。ここから信頼をうけている人はもちろん、だれでも人の知らないところでも徳行の実践を先行することが大事であり、それがまわりの人々にも及ぶ。)

※短歌…和歌のひとつ。五・七・五・七・七の五句体の歌。



二宮翁夜話

著者の福住正兄は、文政7年(1824)、現在の神奈川県平塚市の村の名主の家に生まれ、弘化2年(1845)尊徳の弟子となりました。主に尊徳の身の世話をしていた正兄が尊徳の教えをまとめ、出版したのが『二宮翁夜話』です。二宮翁とは尊徳のことです。

勤儉譲はかなえの足

翁のことばに、わが道は勤儉譲の三つにある。勤とは、衣食住になるべき物品を勤めて産出することをいう。儉とは、産出した物品をむやみに費やさないことをいう。譲とは、衣食住の三つを他に及ぼすことをいう。この譲には、いろいろある。今年の物を来年のためにたくわえるのも譲だ。それから子孫に譲ると、親せき友人に譲ると、郷里に譲ると、国家に譲るとがある。その身その身の分限によって、つとめて行おうべきだ。たとい一季半季の雇い人でも、今年の物を来年に譲ると、子孫に譲るとの譲りは、必ずつとめるがよい。この勤儉譲の三つは、かなえの三本足のようなもので、一つでも欠けてはならない。必ず兼ね行わねばならぬ。

福住正兄原著佐々井典比古訳注『訳注二宮翁夜話(上)』(昭和33年 一円融合会)より



鼎(てい・かなえ)

※かなえ…鼎。古代中国の銅器の一つで、はじめ食物を煮炊きする鍋として用いたが、後に祭りの道具として用いられるようになった。ここにもあるように三つの足で立つ形をしている。